

「洋学文庫」プロジェクトについて

町田 明広

神田外語大学附属図書館には、一八七七年に蔵書となり、それ以降も追加された「洋学文庫」と呼ばれるコレクションが所蔵されている。これは、幕末から明治初期に刊行もしくは筆写された、オランダ語・英語・ドイツ語・フランス語などの外国語の学習・研究に関連する洋学書を蒐集した成果を中心としている。

さらに、同時期の日本語・中国語・朝鮮語・アイヌ語といった東アジアの言語についても、多数蒐集されており、幅広く網羅された言語コレクションである。そこには、今日では入手不可能な古典籍が数多く含まれており、学術的価値も高く、規模も総計一四一六冊と大部で貴重なコレクションである。

最初に、本コレクションについて概要を述べておきたい。これを蒐集したのは、京都の書店主若林正治氏（一九一三～一九八四）で、明治維新から六〇年以上の歳月が過ぎ、幕末・明治初年の学問・文化の重要な一面を伝える「洋学」の書物がすでに散逸し、失われようとしていたことを憂いていた。そして、私財を投じて熱心に蒐集を開始し、この偉大なコレクションを形成したのだ。また、『近世京都出版資料』（共著）の著作を残している書物研究家であり、往年のコレクターとしての名は広く知られている。

若林氏没後、その洋学関係コレクションは雄松堂書店の仲介を経て学校法人佐野学園に移り、神田外語大学開学に

際して、附属図書館に移管され、大学図書館蔵書としての重要な一角を形成することになった。こうした経緯は、洋学研究者の間では広く知られているが、同時に、旧蔵者のコレクターとしての業績も「若林正治旧蔵」の呼称により、今なお記憶に留められている。

さて、本コレクションは重要な文化財であることから、その内容を公表し、教育・研究資料として利用することが当初より望まれていた。そしてこの間、何度かデータベースの構築を試みても、その完成を見ることなく、その後、作業自体も中断していた。

本プロジェクトを始めるにあたり、宮澤眞一氏（北京語言大学局員研究員、元埼玉女子短期大学国際コミュニケーション学科教授）による鑑定を依頼した。その結果、想像を遥かに凌駕した稀有なコレクションであり、これを広く学内外に知らしめるとともに、教育・研究活動において有効活用することが、

本学にとって極めて重要で意義深いものであり、かつ社会的責務と史料するに至った。そして、その思いを実現するために、二〇一四年四月に「洋学文庫」プロジェクトがスタートした。

プロジェクトの目的は、目録の作成を通して「洋学文庫」の全容を明らかにし、その存在を学内外に広くアピールするとともに、主として学内研究者による教育・研究活動での利用に供する。「洋学文庫」そのものについては、デジタルアーカイブ、展示、本学出版局からの翻刻出版等によって公開し、一方で「洋学文庫」を利用した教育・研究活動の成果については、講演会・シンポジウム、紀要等での論文、出版物等で公表することに置いた。

また、以上を通じて、「洋学文庫」の価値を広く社会に認知させ、同時にそれを所蔵する、また研究プロジェクトを推進する神田外語大学への関心を喚起し、ひいては本学のアカデミック

なステータスの向上の寄与にも意を用いることとした。

プロジェクトの実施は、日本研究所が附属図書館と共同で推進するものとし、プロジェクトリーダーを町田明広日本研究所専任講師とした。また、外部の専門家として、宮澤眞一氏に以下に述べるプロジェクト第一期への参加を依頼した。

本プロジェクトは、期間を二期に分け、第一期（二〇一四年四月～二〇一五年三月）は、すでに完了したが、目録を電子データで作成し、その全容を把握すると同時に、それぞれの資料がどのような内容であり、どの程度の価値があるのかを明らかにすることに努めた。具体的には、宮澤氏が日本研究所客員研究員に就任し、本作業のコーディネーターとして従事した。その際、評価・解題・所見をそれぞれに付し、報告書としてまとめた。また、図書館がその内容を目録データベースに取り込

み、日本研究所が精査を進めた。

第二期（二〇一五年四月～）として、日本研究所による精査を継続しながら、ある段階で学内にその内容を公表し、教員個人が自身の教育・研究活動に活かすことが可能かどうかを見極めていただく機会を設ける予定である。それを踏まえた上で、その後のプロジェクトの進め方を検討することにした。

近代日本社会と文化の諸相——人・地・産業のネットワーク

亀井ダイチ・アンドリュウ

明治・大正期の近代日本社会および文化に関しては、さまざまな視点から研究が行なわれてきており、かつてはほとんど焦点の当てられることのなかった地方や女性などの役割についても、かなり明らかにされてきている。しかし、明治や大正時代を近代化、また目

odernityという概念を中枢に据えた視点で理解していく傾向はいまだ根強い。それは、特に英語圏における日本近代史研究において顕著である。しかし、こうした視点からは明治・大正時代は日本の近代化の一過渡期として強く位置づけられ、それゆえにとりあげられない人物や出来事も、そこにあてはまらないケースの場合は自然と副次的な存在として扱われてしまうことが多い。

当時の社会における思想や行動、そして文化を正確に理解していくためには、一方的な枠に収める形ではなく、詳細な歴史事実をもとにし、かつ世界の動きの中に位置づけるミクロ・マクロ双方の視点が大切だと考える。

そうした試みとして、二〇一四年六月に世界遺産として登録が決定した富岡製糸場を、ひとつの切り口として取り上げたい。富岡製糸場が日本の近代化に果たした役割はつとに知られているところであるが、それ以外の多角的な面をも考慮する必要がある。そこにはお雇い外国人や工女だけではない、さまざまな立場の人々が関与し、異なる地方や産業をつなげていた。そして、日本のみならず世界の社会経済事情や

産業の流れのなかに位置づけられているのである。

富岡製糸場と絹産業遺産群のそれぞれの構成資産は、お互いにどんな役割を果たしてきたのか。また、全国のかの製糸場とはどう関わり、経営母体の変化による変遷は何をもたらしたのか。生糸の輸出が発展した裏には、どんな人々がいかに関与してきているのか。当時の人々はその社会の中で何をどう考えていたのか。こうしたことを手がかりに、富岡製糸場を窓口として明治・大正の時代の移り変わりの中の日本社会・文化・人々の思考や役割の変化とその意味を考えていきたい。最終的には、私の主たる研究テーマである近代日本の思想・文化史のなかの一環として、大正十四年に『女工哀史』のような作品が書かれた背景やその反応、後世における影響についてなどを含め、女性史や労働史とは異なる視点を提供できるようにする予定である。

《日本研究所 研究プロジェクト紹介②》

島津久光・小松帯刀による幕末維新政治史の再構築

町田 明広

元治元年（一八六四）から慶応期（二八六五～六七）における政治過程を、最も重要でありながら十分な研究レベルにない薩摩藩、特にこれまで西郷隆盛・大久保利通を中心とする歴史観によって等閑視された最高権力者・島津久光と、その側近で現場での政局運営の総指揮官・小松帯刀を基軸として、幕末維新政治史の再構築を試みることを目的とする。

具体的な研究概要としては、禁門の変から王政復古クーデターに至る事象を、久光・帯刀の視角から分析した政治過程の解明に加え、①久光・帯刀の国体（王政復古・大政委任）・政体（天皇親裁・公議公論）論の変遷の分析、②久光を頂点とする薩摩藩内にお

ける意思決定・指示命令系統の仕組みと帯刀以下藩士の役割分担の検証、③久光・帯刀に対抗する藩内勢力の実態の考察、④この間の国事周旋を可能とした薩摩藩の財政的基盤の究明、⑤薩摩スチューデントを例にした薩摩藩の対外政略や国際認識の解明の五項目である。

具体的には、刊本史料・文献の一部収集と徹底的な読み込みを行ない、かつ都内および鹿児島県や山口市での未公開史料の調査・収集を積極的に実行し、それらの整理・翻刻を行なう。これらの成果を統合して、幕末維新政治史の解明を企図したい。

二〇一四年度は、鹿児島県立図書館の一次史料（藩達留 自文久元年至

元治元年）「藩達留 自文久三年至慶応三年」「島津久光公上洛京都噂書」「島津久光並忠義履歴書」「久光親話記」等）や、鹿児島県歴史資料センター黎明館の薩摩スチューデント関連史料の調査を中心とし、これらの分析から薩摩藩内における意思決定・指示命令系統の仕組みや薩摩藩の対外政略や国際認識に迫りたい。

その他、黎明館の林匡学芸課長、新福大健・町田剛士の両学芸専門員、尚古集成館の田村省三館長、松尾千歳副館長、岩川拓夫学芸員との意見交換を行ない、調査結果の補完を行ないたい。

「パッシング」とされるもの

—— アイヌと民族的判読不能性をめぐる歴史的・理論的研究

マーク・ウィンチェスター

ミシェル・フーコーが言った。「可視性は異である」。近代以来、文化的および民族的なアイデンティティとその主体形成をめぐる理論の大半は、可視性 (visibility) というものに基づいてきた。他者が私たちをどのように「みている」のか。自分たちが自分たち自身をどのように「みている」のか。自己はそのあいだに構成されるものだと言われてきた。それゆえ、この「みる」という行為と、そこで「みられた」情報を私たちは、どのように判読しているのか。判読できるという確信は、私たちに一種の認識論的な確実性を与えた。こうして可視性と近代の知識は、あらゆる形で結びつけられたのである。

このために、「パッシング passing」

と呼ばれる行為は、可視性と不可視性、あるいは私たちのモノとヒトを分類する力、さらに言えば、社会的な境界をめぐる不安を煽る。「パッシング」は、あらゆる文化のおよび民族的なアイデンティティが確立され、そして維持される論理を混乱させる。あるとき、「パッシング」という行為は、そうしたアイデンティティの否定もしくは消滅につながるものとまで理解されてきた。またあるとき、「パッシング」は、私たちの通常の社会認識や文化的な理解可能性に大混乱をもたらすものとされる。しばしば身体的な判読不可能性に基づいた「パッシング」は、人種やジェンダーやセクシュアリティ、または階級の境界線をぼかし、文化のおよ

び民族的なアイデンティティがいかに重なり合い、交差し、互いを構築し、あるいは分解していくのかという事実を私たちに気づかせる。

本研究は、この「パッシング」および身体的な判読(不)可能性という現象が近現代におけるアイヌの歴史においてどのようにあらわれ、または機能してきたのかを追究していくものである。シャモとして「パッシング」するとはいかなることか。アイヌとして「パッシング」する欲望とはどこから生じるのか。あるいは、アイヌとしてあることをあえて「公にしない」というのはいかなる選択か。アイヌの近現代史上、「パッシング」という現象はどのように解釈されてきたのか。今年度は、「パッシング」をめぐる国内外のテキスト分析を主とした研究方法に基づいてこれらの問いにとりかかり、新たなアイヌ現代史の課題を提示できるかを模索してきた。

《日本研究所 研究プロジェクト紹介④》

「婚活」の多様化——オンライン上での出会い

エマ・ダルトン

本研究はインターネット上における恋愛および結婚サービスサイトの分析と、そのサービスを利用する人々を調査することにより、現代の日本人が恋愛相手を探し、見つける過程に光を当てていくことを目指す。「婚活」の一つの手段として、インターネットを通して出会うという方法が人気を高めている。この研究は、婚活している人々、婚活を断る人々を調査することにより、現代の日本人の恋愛に対する態度、あるいは考え方を明らかにする。本研究により、日本が直面する少子化時代において、晩婚や非婚を引き起こしうる現代化に寄り添った男女関係のあり方の変化をより深く把握できることを期待する。晩婚、非婚が進む現代日本社会

で日本人はどのように親密な関係を作っているかが話題となる。この研究では、恋人あるいは結婚相手を探す人の苦労といったものが明らかになることも期待する。そして、マクロな面からは、現代社会の男女のあり方の変化と存続を浮き彫りにするだろう。現代に生きる男女は、恋愛・結婚の面で何を求めているのか、そして異性に何を期待しているのかをより詳しく深く把握すること、日本の現代社会や文化に対する理解が深まるだろう。このような問題を研究することによってジェンダーや恋愛、結婚、親密さに関する社会における規範の変化が浮き彫りなることを期待する。具体的には以下の四項目について調査する。

① どのような人がインターネットを通して恋人・結婚相手を探しているのか

② どのような方法で恋人を探しているのか、あるいは見つけているのか

③ オンラインで恋人を探す人の目的は何か

④ インターネット恋愛・結婚サイトの中の男女像

この研究を進めるため、そして公表するために、この研究と関連するテーマを専門としている研究者を大学に呼び、講演会を開いた（講演会の要旨は、一二〇頁以下を参照）。